

「ありがとう」の人生を想う

—ヨゼフ・ピタウ大司教を偲んで—

高祖敏明

学校法人上智学院 理事長
上智大学教授

大司教ヨゼフ・ピタウ師は去る12月26日午後9時55分、ご病気のため逝去されました。

1928年10月20日のお生まれですので、享年86のご生涯でした。その2カ月前に脳梗塞に襲われ言葉が出なくなられたのですが、それまではお世話になっている医師や看護師、お見舞いに来てくれた知人や卒業生たち一人ひとりの手をとって、「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えるのが常でした。「ありがとう」の人生を全うされたご生涯でした。

ピタウ師は、ローマで20年以上もの重責を担われた後、「皆さん、帰って来ました」と日本に戻りましたが、それほど日本が、日本の人々が大好きでした。いまでも、そのあたりから「皆さん、帰って来ました」と姿を現されるのでは、と思うくらいです。

まばゆい巨星逝く

実はピタウ師は、私にとっては「まばゆい」存在でした。1945年4月18日にイエズス会に入られたとき、私はまだ生まれていませんでした。ハーバード大学で博士学位をとり、1964年に政治学の教員として上智大学法学部に赴任されたとき、私はまだ高校生でした。39歳で上智学院理事長となり、46歳で上智大学学長、その後もイエズス会日本管区長、ローマのグレゴリアン大学学長、教皇庁教育省次官と、次々と要職を歴任されました。

1981年2月の教皇ヨハネ・パウロ2世の来日の折には、気配りの利いたおもてなしをもって接待に当たられました。ところが、その機敏な働き振りと有能さに目を留められた教皇によってローマに呼び戻されてしまいました。上智にとっても日本にとっても痛手でしたが、ピタウ師にとっては、これが世界を舞台に活躍する契機となりました。

ピタウ師逝去の報がローマに伝わると、教皇フランシスコはすぐにイエズス会本部の総長ニコラス神父に電報を送り、お悔やみと「福音のために神に仕えた模範的な人であった」とピタウ師を高く評価して感謝するお言葉を伝えられました。これに添えられたピタウ師の生涯を紹介するバチカンからの記事には「He was an “intellectual, administrative and spiritual giant”.’とあります。

しかし、ピタウ師はこうした「まばゆさ」を、接する人に感じさせないお人柄でした。そうしたお人柄を三つの側面からお話して、ピタウ師を偲ぶことにしたいと思います。

ザビエルを敬愛した宣教師

第一に、ピタウ師は宣教師でした。ご遺影のカードに付したマタイ福音書の「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子としなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28・19、20) とのみ言葉に一生を賭けられた人でした。ローマでの任務を終え、イタリアに残ることもできたのに日本に帰って来られたこと自体、ご自分が宣教師として赴任した日本に骨を埋めたいとの思いがあったからに違いありません。ピタウ師は若いころから東洋の使徒フランシスコ・ザビエルを敬愛しておられましたし、その生き方に憧れを抱いておられました。

教育省次官として世界を飛び回っていたときの話です。ギリシャでヨーロッパの文部大臣会議があり、48人の大臣を前に講演をされたその中で、リングを引き合いに出して語られました。リングといえば、ザビエルが応仁の乱などで荒れていた都を、わずか10日ほど滞在して離れるとき、何度もリングを空にむけて軽く投げ上げ、片手でそれを受けていたことが知られています。この会議の席でも、そのエピソードがピタウ師の頭をよぎっていたでしょうか。師の語られた話はこうです。

〈小学1年生の教室で担任の先生が「リングは何色？」と聞いた。子供たちはどんどん手を上げて、赤、緑、黄色と答える。するとひとりの子が、「リングはみんな白い」と言う。先生はこれに、「そうですね。皮をむけば、リングの中身はみな白いですね」と応じ、「うわべで判断するのではなく、中身、本質を見て」と教えた〉

ピタウ師は、この話から、国籍や肌の色の違い、文化や宗教の違いがあっても、人はみな神様から選ばれてこの世に生まれてきた同じ人間、兄弟姉妹ですと展開されたのでした。これが、民族的対立や紛争が激化しているヨーロッパの現状を念頭においての話であることは容易に察せられるところでしょう。かつてザビエルも、リスボンに引き止めようとする周囲の説得を振り切ってインドに向うとき、「かの地に住む人も神によって創造された人々であり、キリストはその人々をあがなうためにも死なれたのだ」と説いたのでした。

このようにピタウ師は、身近な例から福音のメッセージ、キリストの教えを分かりやすく話す人でしたし、印象に残る話によって人々の心をつかむ才に恵まれた人でした。

「愛を得るために観想」生きる

第二に、ピタウ師は、イエズス会の精神をしっかりと身に付け、これを生きようとした人でした。1998年9月26日、ピタウ師はバチカンのサン・ピエトロ大聖堂で大司教に叙されました。そのときに考案された師ご自身の紋章の下段には、ラテン語で“IN OMUNIBUS AMARE ET INSERVIRE”（すべてにおいて愛し、仕えること）とあります。通常、紋章に付けられた言葉は、その人の信条や生き方を示すものです。

本日の葬儀ミサの聖書朗読として、愛すること（コリント12・31b-13・8b）と、仕えること（マルコ10・35-45）をテーマにした箇所が選ばれたのも、このピタウ師が自らの生き方の土台とし、その信条とした「すべてにおいて愛し、仕えること」を改めて味わい、師を追憶するからに外なりません。そして、ピタウ師が選ばれたこの言葉は、イエズス会の創立者ロヨラのイグナチオが自ら

の霊的体験、祈りの修行と恵みの体験をまとめた『霊操』の、総仕上げともいえる最後の祈り「愛を得るための観想」（230番 - 237番）の一説から採られたものです（ホセ・ミゲル・バラ訳『霊操』新世社、1986年を参照）。

「愛を得るための観想」というのは、自分が生まれてからこのかた「受けた恵みを余すところなく感謝して認め、すべてにおいて主なる神を愛し、仕えることができるように、そのかすかすの恵みを心にふかく知ること」を願う祈りです。たとえば、「神が私をあがなって下さったこと、そして、私個人に下さった賜物を思い起こし、「私が主なる神に似たものとなり、その似姿に造られたので、私をご自分の神殿とされ、私のうちにお住みになる」こと、「地上の万物において神がいかに私のために活動し、働いておられるか」などを思いめぐらして考察し、では「私の方から主なる神に何を捧げ、何を差し上げるべきか」を熟慮し、判断していくのです。

ピタウ師が出された結論は、自分自身を自由も含めてすべて主に返し、主の望まれるところへ派遣されて、そこで出会う人を愛し、その人に仕えることでした。

1970年代末のベトナムとカンボジアとの紛争がもとで、インドシナ難民が大量に生まれました。タイの国境近くにはいくつもの難民キャンプが設けられ、他方、国を逃れるため小さな船にぎゅう詰めになって海を渡ろうとする、いわゆる「ボートピープル」がテレビや新聞で何度も報じられました。このときピタウ師は、「インドシナ難民に愛の手を」と支援募金を学内外に呼びかけ、自ら新宿の駅頭に立って一般社会にも協力を訴えたのでした。

いただいた芳志を教職員と学生の代表とともにタイの難民キャンプに届けたのですが、生活資金以上に必要なのは、人として温もりのあるかわりであり、子供たちとの触れ合いであることに気づきました。そこで帰国後、上智の教職員と学生たち、それに学外の希望者で10人のボランティア派遣チームを編成し、1チーム2週間というローテーションを組んで、順次難民キャンプへと派遣し続けたのでした。これが大きなきっかけとなり、上智大学もアジア重視、ボランティア重視へと活動を広げることになりました。

しかしピタウ師は、同時に決断の人でした。1968年、上智大学も大学紛争に見舞われ、全共闘系学生による主要な校舎占拠が長期化する恐れが明確になったとき、理事長として大学を正常化するために機動隊を導入して占拠を解き、半年間の大学の臨時休校と自主閉鎖を決断されました。この官憲導入によるキャンパス解放は当時初めてのことで、他大学もこれに倣って紛争を収めていった経緯もあり、「上智大方式」と当時のマスコミに報道されました。でもピタウ師自身の述懐によれば、「これで上智が閉鎖になるなら、それも仕方がない」とまで、祈りと熟慮を重ねての決断でした。

仕えられるためでなく仕えるために

第三に、ピタウ師は謙虚に仕える人でした。華々しいご活躍やご経歴の裏に、その土台に、他の人のために（for others）仕える生き方を実践しておられました。

理事長として学長として、学内を足早に移動することが多かったのですが、道筋にゴミが落ちていることに気づかれると足を止め、手ずからそれを拾ってゴミ箱に入れておられました。そして、

キャンパスの掃除を担当していた会社の人には、「キャンパスの掃除は人間教育の原点です。ありがとうございます」と、いつも声をかけておられました。

大司教に叙されたとき、紋章を定めるとともに記念のカードも作成します。紋章そのものをカードの図柄にする例も多いのですが、ピタウ師の場合は、最後の晩餐の席に着く前に、主イエスが弟子たちの足を洗う場面（ヨハネ 13・1-20）を用いておられます。この洗足の儀式は、今日でも聖木曜日の夜に教会で広く行われており、現教皇フランシスコがこの伝統的な儀式に新しい風を吹き込んでいることをご存知でしょう。教皇同様ピタウ師も、これを単なるスローガンやジェスチャーに終わらせず、「人に仕える」を生きる姿勢の根本におかれていた、あるいはそう努めておられた。その決意のほどが記念カードの図柄に込められていたと推察できるのです。

そうした姿勢があったからこそ、掃除をしてくれる人に親しく声をかけ、出会った一人ひとりに、とりわけ病床にあって自分の世話をしてくれる人一人ひとりに、「ありがとう」という感謝の言葉が自然に出てきたのでしょう。

「ありがとう」の人生を生きる

いま最後のお別れをするにあたって、おひとりおひとりがピタウ師との思い出を思いめぐらし、反芻しておられるかと存じます。私どもがピタウ師からいただいたご薫陶、師の宣教師としての「愛し、仕える」生き方に教えられたこと、同じ神様のもとの兄弟姉妹として親しく交わってくださった数々を思い起こし、私たちの方からピタウ師に「ありがとうございました」と申し上げたい。

それと同時に、‘an “intellectual, administrative and spiritual giant”.’ の心に福音宣教という志を抱かせて日本に派遣し、私たちと出会い、交わる機会を与えてくださった神様に感謝の祈りをお捧げしたいと思います。

そして、ピタウ師の心にあった思い、その生き方、人との接し方を私どもも受け継いで、これから生きてまいりたい。今、そう決意してお別れすることにいたしましょう。

ピタウ先生、長い間本当にありがとうございました。天国からどうぞ私どもを見守り、祈りをもって私どもの歩みを導いてください。ピタウ先生、またお会いする日まで。

追悼説教（2015年1月14日、聖イグナチオ教会主聖堂にて）